

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 24 日現在

機関番号：14401

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2014

課題番号：23653147

研究課題名(和文)クライミングにおける視覚障害者とのコミュニケーションの多様性に関する研究

研究課題名(英文)A Study on Aspects of communication among Visually Handicapped and Sighted Climbers

研究代表者

森 祐司(MORI, Yuji)

大阪大学・全学教育推進機構・教授

研究者番号：80182210

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は視覚障害者同士、および視覚障害者と晴眼者がクライミングを行う際に取りうるコミュニケーションの諸相をフィールド調査によるデータにもとづき記述・分析し、多様なコミュニケーションの可能性を発見することにある。暫定的結論として、ボランティアによる「無償」の援助とクライミングスクールなどによる「有償」のサービスに対する肯定的/否定的な意識が、障害者がアウトドア活動に参加する際の実際的な軋轢の原因となっている可能性があることを突き止めるとともに、視覚障害者のコミュニケーションを円滑にするためのデータを収集した。

研究成果の概要(英文)：The objective of this research is to point to successful ways of communication among visually handicapped climbers and sighted climbers by describing and analyzing various aspects of verbal and non-verbal communication at the rock climbing field. A preliminary conclusion is that there can be found mutually contradictory attitudes among climbers toward either voluntary activities or those for profit, and that these attitudes may possibly cause practical conflicts when visually handicapped climbers take part in outdoor activities such as rock climbing.

研究分野：福祉社会学

キーワード：アウトドア 視覚障害 クライミング コミュニケーション

1. 研究開始当初の背景

(1)本研究は、2005年度から2008年度にかけて基盤研究Cで採択された「野外教育現場の生徒間コミュニケーションに表出する共同体意識の観察と分析」(研究課題番号17530363)からの継続的研究である。

「野外教育現場の生徒間コミュニケーションに表出する共同体意識の観察と分析」では、野外教育現場におけるコミュニケーションの観察・分析、およびアウトドアライティングなどの文献調査を行い、アウトドア教育現場においては共同体意識と「遊び心」「楽しみ」という感情が重要な働きを持っていることを解明した。また、インタビュー、行動を共有することによる「参与的」研究方法についての文献調査と実地調査を行い、人間の意識についての定量化(数値化や図式化)に頼らない質的な(記述や物語による)研究の可能性を示した。

調査対象は、信州大学教育学部平野吉直教授の協力によるキャンプ実習と雪上スポーツ実習、奈良教育大学岡村泰斗助教授の協力によるキャンプ実習と子供リバーツーリング教室、黒姫山UCDiパドリングスクール主宰石川義治氏のスキースクール、御在所岳藤内小屋佐々木正巳氏および山岳ガイド二村秀広氏の協力による登山者集団だったが、野外教育の専門教育のためにプログラムされた教育現場の「生徒」(将来の教育者)の共同体意識を中心とした意識変動の動向をつかむための資料を収集するとともに、パブリック/プライベートという視座を導入することで、商業的要素の強いアウトドア・スクールから、インストラクターと生徒間の人間関係に個人的つながりの要素の強い山岳会、さらには「山好き」という共通の関心を中心としてつながる山小屋の常連に至るまでのコミュニケーションの様態を観察・調査した。

(2)その際、新たな調査対象として、視覚障害者に対するクライミングスクール運営を中心に活動しているNPO法人「Monkey Magic」のクライミングスクールの取材を行った。視覚障害者と晴眼者との共同参加を主眼とするこの団体の活動を調査することにより、「コミュニケーション」「共同体意識」を考察する際の「言語使用」がいかに既成概念による制約を受けているかが浮き彫りになった。特に身体的活動が中心となるアウトドア現場において、視覚が制限されている「仲間」との間で交わされる言語コミュニケーションの困難について、さらに観察する必要性が生じた。

(3)研究開始当時障害者のアウトドア活動を活発にする社会的動きがあった。障害者を対象としたサークル、NPO等とのコンタクトを取り、この知見を障害者のアウトドア活動の促進に生かす可能性を模索するため、視覚障害者のクライミングに焦点を当てて研究

を開始した。

具体的社会状況としては、平成23年に「スポーツ基本法」が施行され、障害者のスポーツ活動参加を促進することが法的に定められたことがある。文部科学省は、「平成23年8月に施行された「スポーツ基本法」においては、「スポーツは、障害者が自主的かつ積極的にスポーツを行うことができるよう、障害の種類及び程度に応じ必要な配慮をしつつ推進されなければならない。」とされています。」と宣言し、「文部科学省では、スポーツ基本法に基づき、平成24年3月にスポーツ基本計画を策定し、「年齢や性別、障害等を問わず、広く人々が、関心、適性等に応じてスポーツに参画することができる環境を整備すること」を基本的な政策課題として、障害者スポーツの推進を図っています。」

(http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/uishin/ 文部科学省ホームページ(2015年5月24日参照。)としている。この理念のもと、平成24年度より、毎年、「地域における障害者のスポーツ・レクリエーション活動に関する調査研究 報告書」が発表されているが、その平成24年度の報告書の「まとめと提言」には障害者スポーツの振興が遅れていることについて以下のように指摘している。

「障害福祉施策における障害者スポーツは、障害者の生活支援の一部として扱われるため、市区町村レベルで十分なサービスが提供されているとは言い難く、事業が実施されていない自治体も少なくない。」(166-67)

(http://www.mext.go.jp/component/a_menu/sports/detail/_icsFiles/fieldfile/2014/06/13/1334471_09_1.pdf 2015年5月24日参照。)

本研究は、このような背景のもと、視覚障害者と晴眼者がともにクライミングを学び楽しむNPO活動の取材を通して、「コミュニケーション」というキーワードのもとに障害者福祉に貢献する目的で開始された。

2. 研究の目的

(1)視覚障害者同士、および視覚障害者と晴眼者がクライミングを行う際に取りうるコミュニケーションの諸相を記述・分析することで、非言語コミュニケーション(身振り、眼差し等)が制限された環境における言語的コミュニケーションの限界を明らかにし、よりよいコミュニケーションの樹立を目指した指標を提示する。

(2)現場での工夫による視覚障害者と晴眼者との多様なコミュニケーションの可能性を発見し障害者福祉に貢献する。

(3)「ライフストーリー」等の手法を用い、視覚障害者のアウトドア活動についてのエスノグラフィーを作成する。

3. 研究の方法

(1) ロッククライミングという非日常的活動の場で視覚障害者と晴眼者がともにロッククライミングを学び楽しむ場を提供するNPO 活動を中心に参与観察による調査を行う。ビデオ撮影等により記録するケースと、自然なコミュニケーションの場を作る必要上ビデオの使用やメモ作成を制限し、現場に複数回参加し観察の密度を濃くすることで、記憶にもとづくフィールドノーツを作成によりデータを残すケースがある。

(2) 障害者スポーツに関する研究書、論文等の文献を検討し、特に視覚障害者のアウトドア活動、クライミングに際してのコミュニケーションにかかわる理論的分析を行う。文献は以下のように分類される。

障害者スポーツ一般に関するもの
視覚障害に関するもの
アウトドアスポーツ、クライミングに関するもの

4. 研究成果

(1) 視覚障害者のクライミング、視覚障害者と晴眼者の協同場面に関する動画データを中心とした資料の蓄積ができた。データは、以下のように分類できる。(本研究期間以前のものも含む。)

アウトドアでのクライミング活動

主な取材地は、静岡県伊豆半島城ヶ崎海岸クライミングエリア、長野県小川山山麓廻り目平キャンプ場近辺エリア、三重県御在所岳藤内壁クライミングエリアであるが、これらのエリアにおいては、アプローチ(クライミングエリアまでの登山道等)における視覚障害者の危険、晴眼者の援助にかかわるデータの収集、クライミング中の「雑談」に表れる視覚障害者の自然についての意識等についてのデータが収集できた。

インドアでのクライミング活動

主な取材地は東京近辺のインドアクライミングジムである。(固有名詞は省略。)上記のアウトドアクライミングでのデメリット(アプローチの難しさ)がないということで、実際には、視覚障害者のクライミングは主にインドアで開催される。

ここでは、視覚情報がない状態での手がかりや足がかり(ホールド、スタンス)についての言語による指示の方法、クライミング前に手でなぞることができるボードにルートを描きクライミング手順のイメージをつかむ方法等、テクニカルな面でのコミュニケーション方法についてのデータを収集した。

宿泊施設等における活動
食事、宴会等のごく日常的行動やその際の

会話を記録することで、特に視覚障害者にとっての「ふつう」の会話に健常者(晴眼者)が当惑する姿、「遠慮」と「率直」との使い分けの困難についての状況を観察することができた。

(2) 質的データの収集により、ボランティア活動による「無償」の援助とクライミングスクールや山岳ガイドなどの「有償」のサービスとのそれぞれに対する肯定的/否定的意識が、障害者と健常者ともに内在し、障害者がアウトドア活動に参加する際の実際の軋轢の原因になっている可能性があることが判明した。

「支援」を受ける側(障害者)の意識の中には「無償の奉仕」を求める気持ちと、一方で「特別な技術(クライミング)を修得するにはお金を払ってでも指導を受けるべきだ」という、相反する意識がある。また、指導者側にも、「障害者福祉を利潤追求の商売にすることへの反感」「障害者と健常者両者に対してわけ隔てのない対応をするべきだ」という別々の意識がある。障害者に対しては無償でガイドをするプロ山岳ガイドの意識、晴眼者と視覚障害者に対して同等の有料指導をするクライミングスクールの取材を通して、(視覚)障害者がアウトドアの場に進出する際の社会の理解に含まれた重層的な局面と、障害者が感じる「一体感」「疎外感」、「排除の感覚」という複雑な感情の理解に向けて考察する必要があることがわかった。

(2) 鈴木正行『視覚障害者とノーマライゼーション 視覚障害者の障害受容と社会環境の変遷 「盲人たちの自叙伝を視座にして」(学文社、2008)は、いわゆるライフストーリー研究にもつながる、当事者の声にもとづく研究であるが、以下の(3)で述べる理由により今後の継続的取材調査を必要とするものの、視覚障害者がクライミングという活動に参加することになった動機、活動をする上での困難、必要とする支援と自立するための方法等について、障害当事者側の視点に立った「ライフストーリー」の作成を可能にするラポール(信頼関係)を形成した。

(3) 本研究者の所属機関における職務の異動(外国語教育にかかわる職務のエフォート率の増加)、および、視覚障害者と晴眼者の表層部にあるコンフリクトの原因を探るためにフィールドの見直しと拡張が必要になったことにより、研究の進捗が大幅に遅れ、成果の具体的な発表をすることができなかつたこと、また、交付された研究費の大半を返却せねばならない事態となったことは遺憾である。今後も本研究テーマの調査研究を継続して、さらにデータを補強し、データの分析・考察を重ねて、具体的成果を発表することを今後の課題とする。

5．主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

6．研究組織
(1)研究代表者

森 祐司 (MORI, Yuji)
大阪大学・全学教育推進機構・教授

研究者番号：：80182210